枚方淀川探鳥会
2026年2月

2026年(令和8年)2月1日(日) 9:00～12:00
日本野鳥の会大阪支部
前田初雄、甲田正二、西脇淳浩、香月清宏
松井正夫、新名泰博、平　軍二(☎090-6901-1425)

Ⅰ 今月の鳥　イワツバメ

イワツバメ　20260104　迫田昌宏氏

①イワツバメ　スズメ目ツバメ科イワツバメ属

L　雄54cm　雌64cm　　漢字名　岩燕

学名　*Delichon dasypus*　英名　Asian House Martin

1月4日開催の探鳥会での主役はイワツバメ、スタート～終了まで淀川本流、河川敷の観察路上空を、切れ間なく飛び回り、観察個体数は200羽としたが、実数はそれ以上に多かったと思われる。

このコースでは天野川合流点近くの堤防上の橋裏にコロニーがある。
→

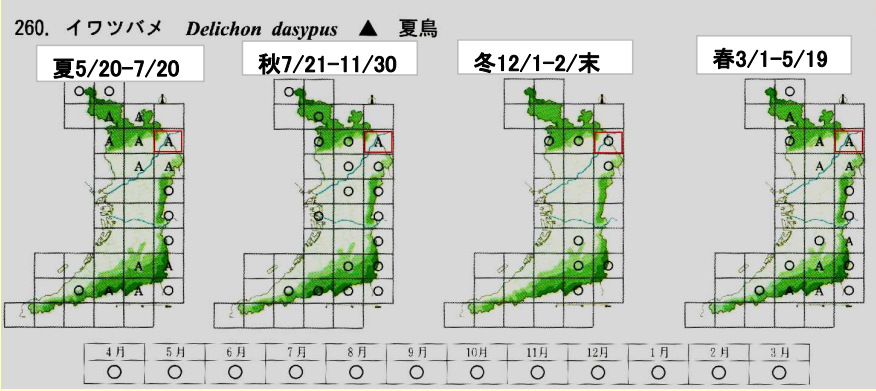
イワツバメの巣　20240603(平)

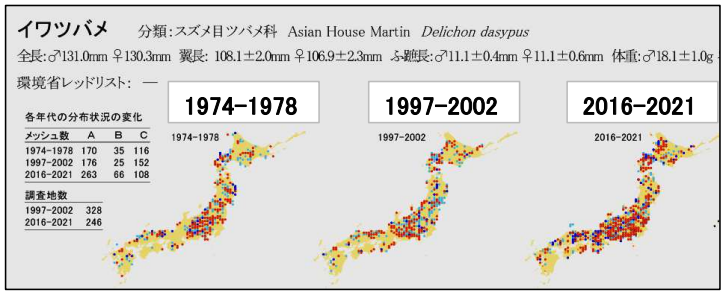
②大阪府のイワツバメ　→

（大阪府鳥類目録　2016）

大阪府をぐるり取り巻く山地に近い所に観察記録、そして繁殖Aランクの所がある。

右図の赤枠は、枚方淀川探鳥会の天野川合流点のコロニーを示している。



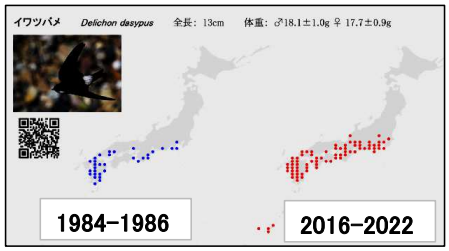


←　③イワツバメ　日本の繁殖状況

全国鳥類繁殖分布調査2016～2021年

（鳥類繁殖分布調査会　2021年）

過去3回の調査を通じて記録メッシュ数が増加しており，繁殖の確認されたメッシュ数も増 加しているが，これは重点的な集団繁殖地の調査を行なったためで，現地 調査で記録された地点は328地点から246地点と減少しており，1990年代 からは減少していると考えられる。



←④イワツバメ　日本の越冬状況

全国鳥類越冬分布調査2016～2022年　バードリサーチ・日本野鳥の会

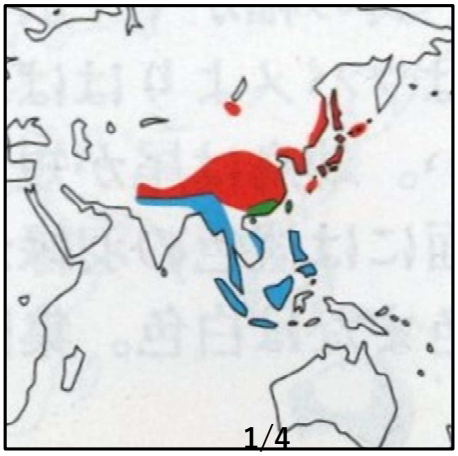
全国に主に夏鳥として渡来するが，太平洋側を中心とした地域で一部が越冬する。その越冬分布が 1980 年 代に比べて2010年代は大きく拡大していた。

⑤世界のイワツバメ分布図

真木・大西(日本の野鳥590)　→
2000年平凡社

日本では夏鳥として九州以北にツバメより早く渡来する。東海地方や西日本では少数越冬し、九州では相当数越冬する。

越冬地は、フイリピン・マレー半島・インドネシアなどである。



イワツバメ　20260104　迫田昌宏氏

Ⅱ 探鳥会観察チェックリスト（第8版）

観察回数は、平が担当した2012年1月～先月2024年12月までの13年間での観察回数です。
100回以上は留鳥、50回前後は冬鳥or夏鳥、10回以下は珍鳥？

第8版	科名	鳥名	観察回数	2025 1	2025 2	2025 3	2025 12	2026 1	2026 2	2026 3	第8版
				5	2	2	7	4	1	1	
12	カモ	マガン	1								12
18		ツクシガモ	3								18
23		トモエガモ	2	9							23
24		シマアジ	1								24
26		ハシビロガモ	9	2			1				26
27		オカヨシガモ	52	42	18	8	55	45			27
28		ヨシガモ	21	5	8	2		15			28
29		ヒドリガモ	48	3	9	2					29
30		アメリカヒドリ	6								30
32		カルガモ	97	6		16	4	3			32
33		マガモ	58			1					33
34		オナガガモ	8								34
35		コガモ	62	3	12	16					35
39		ホシハジロ	46	35	27	4	31	62			39
40		アカハジロ	6								40
41		メジロガモ	1								41
43		キンクロハジロ	47	94	65	24	256	190			43
44		スズガモ	7	8	1	1	2	1			44
56		ミコアイサ	2		1						56
58		カワアイサ	50	11	5		6	9			58
59		ウミアイサ	3								59
64	キジ	キジ	54		1		2	2			64
69		アマツバメ	2								69
80	カッコウ	ホトトギス	2								80
82		ツツドリ	2								82
83		カッコウ	1								83
89	ハト	キジバト	123	5	12	10	3	4			89
96	クイナ	クイナ	12								96
100		バン	23								100
101		オオバン	55	81	93	112	94	56			101
103		ヒクイナ	7								103
117	カイツブリ	カイツブリ	51	4	5	5	11	2			117
119		カンムリカイツブリ	64	29	21	4	23	14			119
121		ハジロカイツブリ	4								121
127	チドリ	タゲリ	1								127
128		ケリ	27								128
134		イカルチドリ	9								134
135		コチドリ	32								135
136		シロチドリ	4								136

第8版	科名	鳥名	観察回数	2025 1	2025 2	2025 3	2025 12	2026 1	2026 2	2026 3	第8版
				5	2	2	7	4	1	1	
144	シギ	チュウシャクシギ	2								144
163		トウネン	1								163
165		ハマシギ	1								165
183		タシギ	5								183
188		イソシギ	89	1	1	2	2	3			188
190		クサシギ	3								190
192		キアシシギ	2								192
198		アオアシシギ	1								198
213	カモメ	ユリカモメ	22		2						213
221		ウミネコ	3								221
222		カモメ	3								222
226		セグロカモメ	20	2	2			1			226
233		コアジサシ	9								233
270	アビ	シロエリオオハム	1								270
315	ウ	カワウ	122	14	13	23	9	14			315
319	トキ	ヘラサギ	1	1	3	1					319
320		クロツラヘラサギ	1								320
328	サギ	ゴイサギ	10				1				328
330		ササゴイ	18								330
332		アマサギ	3								332
333		アオサギ	124	3	2	1	7	5			333
335		ダイサギ	120	2	2		12	4			335
337		コサギ	111	3	3	1	9	5			337
343	ミサゴ	ミサゴ	75	2	3	2	4	2			343
344	タカ	ハチクマ	2								344
352		ツミ					1				352
353		ハイタカ	36	1		1	4				353
354		オオタカ	27	1		2					354
355		チュウヒ	2								355
356		ハイイロチュウヒ	1								356
359		トビ	102	2	3		2	2			359
363		サシバ	1								363
366		ノスリ	37		2			1			366
371	フクロウ	オオコノハズク	1								371
384	ルワセミ	カワセミ	106	1	2		3	2			384
389	キツツキ	アリスイ	10								389
390		コゲラ	102	3	1						390
394		アカゲラ	6								394
402	ハヤブサ	チョウゲンボウ	57				1	1			402
407		ハヤブサ	31	2	2	1	2	1			407

Ⅲ 先月(1/4)探鳥会報告

スタート地点では恒例の関西医大タワーにいるハヤブサを見てスタートした。淀川本流では珍しくセグロカモメが1羽、浅瀬に休んでおり、近くにはアオサギ・キンクロハジロ・オオバン、上空をイワツバメが群舞していた。その後も本流にはキンクロハジロ・ホシハジロ・オカヨシガモの群を中心にカモが7種、オオバンの群、青・大・小のサギなどが次々観察できた。猛禽類は今日の資料に入れたミサゴの他、ハイタカ・トビ・ノスリ・チョウゲンボウなどが上空を飛んだ。セキレイは黄・白・黒の3種が天野川・黒田川などで出たが、河川敷の芝原にいて毎年良く観察できるタヒバリは出なかった。冬の小鳥ではツグミ・シメ・ベニマシコ・アオジを観察したが、シロハラ・アトリは観察できなかった。イワツバメ、スタートから終了まで淀川本流のみでなく、河川敷の観察路上空も切れ間なく飛び回り、200羽としたが、実数はそれ以上に多かったと思われる。イワツバメ・カモ・オオバンを中心に観察個体数は多いものの観察種数が50種にとどいていなかったことから、牧野ゴルフ場の南側、遊水池に足を延ばしたが水が無く、コガモ・マガモの姿はおろか、草原と竹林に変じていた。磯島浄水場取水地に戻り鳥合わせ、トータル45種（先月より2種減）で終了した。

第8版	科名	鳥名	観察回数	2025 1	2025 2	2025 3	2025 12	2026 1	2026 2	2026 3	第8版
				5	2	2	7	4	1	1	
411	サンショウクイ	サンショウクイ	1								411
419	カササギヒタキ	サンコウチョウ	1								419
425	モズ	モズ	114	4	6	4	12	6			425
435	カラス	ハシボソガラス	125	23	9	28	57	38			435
436		ハシブトガラス	119	5	3	3	3	6			436
440	シジュウカラ	ヒガラ	1								440
442		ヤマガラ	7								442
447		シジュウカラ	116	4	2	4	4	4			447
448	ツリスガラ	ツリスガラ	1								448
450	ヒバリ	ヒバリ	68		1			90			450
456	ヒヨドリ	ヒヨドリ	126	320	270	300	215	200+			456
458	ツバメ	ショウドウツバメ	6								458
461		ツバメ	64								461
462		イワツバメ	54	30	50	30	60				462
463		コシアカツバメ	23								463
464	ウグイス	ウグイス	119	4	2	7	2	1			464
467	エナガ	エナガ	93	6	4	1	1				467
476	ムシクイ	センダイムシクイ	7								476
479		エゾクシクイ	1								479
481		メボソムシクイ	5								481
482		オオムシクイ	5								482
484	ヨシキリ	オオヨシキリ	33								484
485		コヨシキリ									485
497	セッカ	セッカ	32								497
501	メジロ	メジロ	103	30	4	3	4				501
502	キクイタダキ	キクイタダキ	8								502
507	ムクドリ	ムクドリ	113	35	107	150	55	16			507
509		コムクドリ	5								509
512		ホシムクドリ	2								512
525	ツグミ	マミチャジナイ	1								525
526		シロハラ	54	5	7	3					526
527		アカハラ	2								527
531		ツグミ	60	1	33	14	4	2			531
532		ハチジョウツグミ									532
533	ヒタキ	エゾビタキ	9								533
534		サメビタキ	2								534
537		コサメビタキ	18								537
539		オオルリ	4								539
543		ノゴマ	1								543

第8版	科名	鳥名	観察回数	2025 1	2025 2	2025 3	2025 12	2026 1	2026 2	2026 3	第8版
				5	2	2	7	4	1	1	
550	ヒタキ(続)	キビタキ	16								550
554		オジロビタキ	1								554
556		ルリビタキ	1								556
561		ジョウビタキ	60	4	6	6	3	2			561
564		イソヒヨドリ	39			3		1			564
568		ノビタキ	13								568
575	スズメ	スズメ	125	130	150	62	80	56			575
584	セキレイ	キセキレイ	42	1	1	1	3	1			584
585		ハクセキレイ	116	21	6	14	14	17			585
586		セグロセキレイ	109	2	1	1	3	4			586
595		タヒバリ	35			20					595
597	アトリ	アトリ	29	12	30	14					597
598		シメ	42				5	1			598
600		イカル	17	5		10					600
606		ベニマシコ	44	3			3	2			606
608		カワラヒワ	114	17	18	43	7	4			608
613		マヒワ	6								613
618	ホオジロ	ホオジロ	119	4	6	10	4	6			618
622		ホオアカ	6								622
625		カシラダカ	23								625
626		ミヤマホオジロ	1								626
633		アオジ	70	6	12	13	9	7			633
637		オオジュリン	17								637
9	キジ	コジュケイ	13								9
11	ハト	カワラバト(ドバト)	121	100	60		51	46			11
30	ムクドリ	ハッカチョウ	1								30
		カッコウSP	5								
		アイガモ	3								
		メボソムシクイSP	7								
		ヒタキSP	3								
種数合計(自動計算)				53	52	47	47	46			
個体数合計(自動計算)				1147	1108	1047	1144	955			
探鳥会参加者数				26	24	30	39	35			

13年間観察回数	1～2回	
	100回以上	
樹林伐採影響でいなくなる種		

2012年1月～2024年12月の13年間
①観察回数の少ない種（1～2回）
②観察回数多い種（100回以上）
③樹林伐採の影響を受けると思われる種

鳥写真3枚
（迫田昌宏氏）

ホオジロ(20260104)

ベニマシコ(20260104)

ハヤブサ(20260104)

Ⅳ　次回は3月4日（日）
午前9時　ラポールひらかた前

冬鳥は渡去の準備、留鳥は繁殖の準備に入っており、春の歌を歌ってくれると思います。
今月と同じように、大阪支部HPからホームズ様式からお申し込みくださるようお願いします。

V 野鳥を友に より 「イワツバメ」 朝日文庫1989高野伸二

今は写真図鑑全盛の時代となり使っている方は少なくなったが、私が鳥を始めた40年前は高野伸二氏が執筆され、1982年に日本野鳥の会より発行された「フィールドガイド 日本の野鳥」が最高・最良の図鑑でした。その高野伸二氏は1984年に亡くなられたが、図鑑作成の経緯などについて書かれていた文章を集約し「野鳥を友に」と題して1985年に発刊され、更に1989年には文庫本として再発行されました。その中からイワツバメを抜粋しました。

イワツバメ

昭和四十九年の五月十日の午前であった。夜来の雨もあがって木々の緑が美しい。

庭に出てふと上を見るとイワツバメが数十羽空を飛びまわっている。私の住んでいる都下日野市内でも近年数がふえているイワツバメであるが、こう集まっているのは何か虫が飛んでいるのかとしばらく空を仰いでいたが、ふと足元を見てびっくりした。イワツバメの群れを誘った原因がそこにあったのである。

冬のある日、野鳥のえさ台にでも利用しようかと、散歩のついでに近くの林から持ち帰った朽ち木の表面に、シロアリの羽の生えたのがびっしりとついているではないか。木の中からそれこそわくように出てくるヤツに押されるように、次々と空中へ飛びたつシロアリを、低空を飛びまわりながらイワツバメの群れが捕らえる。

私はシロアリを退治するのも忘れて、それにしてもよくも知って、よくも集まったものだと改めて空を仰いで感嘆した。

本で調べたら、ヤマトシロアリは四月末から五月の雨上がりなどの、急に気温の上がった日の午前によく大発生をするとあった。なるほどこの日はその条件にぴったり、後で聞いた

ら家の近くや都内でもシロアリ発生が数件あったとのことであった。ごちそうにありついたイワツバメがよそでもいたことであろう。

イワツバメはふつうのツバメより小さくて、尾の切れこみが浅く、腰が白いので見分けられる。その名の通り、元来は、岩のへこみなどに巣を作っていたが、近年はすっかり人家や橋の下にすみつき、山地に多かったのが平地や市街地でもよく見られるようになった。

英名では house martin というから、ヨーロッパでは日本よりも古くから人家に営巣していたのかもしれない。

イワツバメは集団で巣を作る。学校や旅館や駅の建物は格好の営巣場所となり、数百とか数千という巣が作られる場合もある。何千羽というイワツバメのふんが、ガラスや床や人の衣服をよごすというので、巣をとり除いたために、非難を浴び

たり法律違反だと訴えられたりする事件も起こる。

イワツバメがたくさん巣を作っているある店の玄関口に「ツバメは意地の悪い人にふんをおとします」と書いた札が下がっているのを見たことがある。

なるほどこれではふんを落とされたほうも、文句を言えないなと私はにやにやして眺めていた。